

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 22 日現在

機関番号：12703

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2015

課題番号：25380649

研究課題名(和文)「引きこもり」の自立支援活動における相互行為の分析

研究課題名(英文) A conversation analysis of independence support activities for hikikomori

研究代表者

岩田 夏穂 (Natsuho, Iwata)

政策研究大学院大学・政策研究科・准教授

研究者番号：70536656

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、まず、「引きこもり」と呼ばれる若者の自立支援活動における支援者と被支援者(支援組織利用者)間の相互行為をビデオに収録し、その分析を行なった。とくに、どのように「支援」という活動として達成されるかを、会話分析の手法を用いて分析した。分析にさいしては、意思決定のプロセス、トラブル語りの開始、自己卑下の展開といった特徴に焦点を絞った。また同時に、幅広くトラブルを抱える人々をめぐる他のやり取りにも注目した。例えば、福島第一原発事故の避難者のトラブル語りに対するボランティアの共感の示し方等について分析を深め、その成果を海外に発信した。

研究成果の概要(英文)：This study first focused on the interaction between young adults who avoid social contact (so-called “hikikomori”) and counselors at a vocational-independence support program. Using conversation analysis as a research method to analyze video-recorded data, we clarified how the participant’s interactions were organized to achieve the “supporting” activity, and documented several conversational practices for making decisions, prompting the discussion of personal issues, and eliminating producing self-deprecation. We also investigated trouble-telling activities in other environments, such as the interactions observed at emergency shelters for evacuees of the areas affected by the Fukushima Daiichi Nuclear Power Plant explosion. We developed an analysis of how volunteers showed their empathy towards evacuees when listening to their personal experiences, and presented our findings at several international conferences and in a number of international journals.

研究分野：社会言語学、日本語教育

キーワード：就労支援 自立支援 カウンセリング 会話分析 相互行為 トラブル語り 若者

1. 研究開始当初の背景

本研究の代表である岩田は、日本語教育の現場の実践に注目し、日本語母語話者と非母語話者の相互行為における参加の様相と学び、また、日本人住民と外国人住民との「対話」を分析し、教育現場の実践に向けた提言をしてきた。これらの研究は、日本語の非母語話者が、とくに「学習活動」として特徴づけられる環境における母語話者との相互行為を通して、日本語を習得する過程に焦点を絞った分析である。それに加えて、平成 23 年度より「福島県におけるボランティアと被災者の相互行為」のプロジェクト(平成 23 年度 基盤研究(C)代表者:西阪仰)に参加し、東日本大震災および原発事故の避難者とボランティアとの相互行為の分析を行った。これは、ボランティアがコミュニケーションの「やり方」を習得するプロセス、すなわち、同じ言語を共有してはいるが、具体的なコミュニケーション状況への「社会化」を焦点とした研究である。

このプロジェクトをきっかけに、震災ボランティアで、「引きこもり」および「ニート」の支援に携わる方の協力を得て、若者の自立支援のための NPO 法人組織の施設において、支援者と利用者の相互行為の収録およびパイロット的分析を始めた。

「引きこもり」に関する社会学的研究は、「引きこもり」という現象を相互行為能力の何らかの「欠落」として捉えてきたが、実際の相互行為を観察するかぎり、支援組織の利用者(「引きこもり」の若者)は、その相互行為に参加する能力を十分に発揮していた。また、従来のように、「支援」を一つの研究環境の前提としてとらえるのではなく、あくまでも一つ一つの相互行為の積み重ねであると考え、そこでの活動が相互行為の具体的な展開のなかでどのようにして「支援」という意味を得るのかを検討したいと考えた。以上の問題意識から、本研究では、支援者と施設利用者のあいだの実際の相互行為を収録し、それを「会話分析(Conversation Analysis、以下 CA)」の手法を用いて分析するという初めての試みを目指した。協力機関である自立支援組織側の意向から、特に支援者の振る舞いに重点を置いて分析することにした。

CA の分析技法は、後述のようにデータの観察と分析の継続に加え、定期的な訓練の機会を得ることによってのみ維持できる。本研究にとって重要な「共感」や「連帯」、相互行為における会話参加者の知識および身体性、マルチ・モダリティ等のトピックは、海外の CA 研究で新たな知見が報告されている。そこで、第一線で活躍する研究者を招聘するトレーニング・セッションの開催を計画した。

また、すでに一定の分析を終えた福島の足湯データの記述を精緻化し、発展させた成果を国際的に発信することは、その社会的意義から急ぐべきであると判断し、上述の「引きこもり」の就労支援データの分析と並行して

それらの作業を行い、セッションの成果を反映させ、海外に発信することを目指した。

2. 研究の目的

本研究では、(1)支援者が、利用者との相互行為において用いる、利用者に合わせてさまざまな支援の「方法」に注目し、その方法が用いられる環境や特徴を記述することを目的とする。(2)「引きこもり」の若者が、カウンセリングにおいてどのように相互行為に参加しているのか、その特徴を示す。支援活動として行われる様々な相互行為のパターンを抽出し、日常会話を含む他の相互行為ジャンルと比較することで、支援活動の相互行為上の特徴を明らかにしていく。

以上を踏まえ、支援活動を相互行為として組み立てるにあたり、どのようなやり方がより効果的であるかについて、これらの点を検討することにより、最終的にさまざまな支援活動に携わる人々に向けて具体的な提言を行うことを目指した。

3. 研究の方法

本研究で用いた分析方法は、「会話分析(CA)」で、実際の相互行為を対象とし、録画データから、人々がやり取りにおいて行っていることがどのように組織化されているのかを明らかにするものである。

収録した「引きこもり」の自立支援組織の支援プログラムにおけるカウンセリング・セッションは、専門知識を持つ支援者が、定期的に事務所を訪れる利用者で行う約 1 時間程度の面談である。多くの場合は一対一で行われるが、支援者が 2 名の場合もある。利用者は、現在の状況を報告し、支援者とともに次の段階についての確認を行なう。次の段階は、利用者の状況によって多様であり、カウンセリングはその状況に合わせて行われる。具体的にを行った作業は次の通りである。

(1)支援者と利用者の対面カウンセリング・セッションの場面を録画録音した。全部で 13 セッション収録した。

(2)音声部分を詳細に書き起こした。

(3)相互行為のさまざまなパターンを析出した。特に、利用者のカウンセリングにおける相互行為への参加の仕方、および支援者が用いる、利用者に合わせてさまざまな支援の「方法」に注目し、その方法が用いられる環境や特徴を記述した。

4. 研究成果

本研究で明らかにした特徴のうち、ここでは、「意思決定のプロセス」「悩み・心配事の提示の開始」「『自己卑下』発話の連鎖的特徴」について述べる。

(1) 意思決定のプロセス

ここでは、就労に向けた利用者の意思決定プロセスにおける支援者の提案と利用者の受諾あるいは拒否という 2 つの行為の連なり

(連鎖)に注目した。そして、受け入れられる提案と拒否される提案の構成(デザイン)と会話の展開における位置という観点から分析した結果、受け入れられる提案について、4つの特徴が観察された。

まず、次の2点を【事例1】で検討する。受け入れられる提案は、利用者によりすでに表明された、あるいは含意された関心や態度、意向に沿った形でデザインされている。

利用者のために特にあつらえられたわけではないような出来事についての提案としてデザインされている。

なお、事例で用いている文字化の記号は、<http://www.augnishizaka.com/transssym.htm>に基づいている。

【事例1】(支:支援者, 利:利用者)

- 1 支: 職業 訓練校:: の:: (そ)
 2 (0.2)見学ツアーみたいなのあ
 3 ったら< 行く:?
 4 (.)
 5 利: ああ: あったら行きたい:::~::~
 6 です

支援者の提案は、「あつたら」と条件付きという形をとることで受け入れた後の拘束力が弱められており、文末は、動詞の「行く」が疑問の音調で発音されているだけで、いかなる助詞(「か」「の」「ね」「よね」など)も伴っていない。すなわち、相手の意思に関する提案者側の様々な(ありうる)想定から中立的な言い方があえて選ばれているように見える。また、「職業訓練校の見学ツアーみたいな」という、とくに利用者のためにあつらえられたものではない(つまり、「見学する」という行為の実現に関して利用者も責任がないし、支援者も特にこの利用者に対して責任を負うわけではない)出来事(催し)についての提案となっている。さらに、「職業訓練校」は、すでにこの前に利用者の側から「職業訓練ではないですけど、そういうのを受ければ就職しやすいのかな」と言い出されたことであり、利用者がすでに表明した意向に沿った形で組み立てられている。

次に、【事例2】で、次の2点を検討する。

利用者の行動・状態を問題化しない形で組み立てられている。

受諾の後の実行への拘束力が弱められた形になっている。

【事例2】

- 1 支: (.nhh) 'あい↑なんか向こう
 2 一ヶ月間ぐらい入れてる:↑:
 3 (.)
 4 支: °どうして↑る°
 5 (.)
 6 利: えっと:::- (0.2) 十月以降は:,
 7 まだ入れて::: ないです↓ね:,
 8 支: ああ↑そうなんだ。>あのね:, <'
 9 っか月分↑ぐらい ずっと入れとく

- 10 ↑と:,
 11 (0.4)
 12 支:→ 向こうもシフト組みやすいみたい
 13 だか↓ら:
 14 利: ああ(h)
 15 支:→ 仕事来↑やすくなるよ。
 16 (0.3)
 17 支:→ みたいよ?,
 18 利: ##はあ:: じゃあ:##
 19 支: ん:ん,
 20 (0.3)
 21 利: はやめに入れ[と°°けぱ°°

12行目で「向こうもシフト組みやすいみたいだから」と、「向こう」、すなわち第三者の都合を理由として提示している。つまり、利用者の側の事情(利用者の能力、行動など)を問題化することが避けられている。また、15行目では、「仕事来やすくなるよ」と、あくまでも利用者の利益となる情報の提示という形式がとられている。17行目では、わずかな間合い(16行目、以下行番号のみ記す)のあと、「みたいよ」と、情報の確実度を弱めるような言い方が付け加えられる(これも即座の応答の不在を受け、応答を追求する工夫であるように見える)。利用者の18行目の応答は、幾分不完全なものであるが、基本的には情報を受け止める形になっているように見える(「じゃあ、早めにいれておけば[仕事来やすくなる]」)。提案の受諾として理解可能なこの応答は、実行への拘束力をかなり低めているように見える。

また、この提案は、支援者の1~4行目の質問に対する、利用者の6~7行目の返答(シフトを「入れていない」)を受けてのものである。もしこの利用者の返答が肯定(「入れている」)であったならば、この提案はなかったであろう。この質問と返答のやりとり(1~7)は、提案の受諾にとって、2つの点で重要である。ひとつは、提案が受け入れられる可能性が無ではない条件(シフトをまだ入れていないということ)が確認されたうえでの提案であるという点である。もうひとつは、じつは、この1~4行目の質問を聞いただけで、それへの返答しだいによって、それにかかわる提案(「入れていないなら入れたほうがよい」)が次に来ることがある程度予想できるという点だ。もし利用者がこの時点で提案を受け入れる用意がないならば、「入れていない」ではなく、「9月までは入れてある」と、少なくとも形式上は肯定的な返答が可能だったはずだ。にもかかわらず、利用者が否定的返答(「入れていない」)をしたという事実から、利用者にもその来るべき提案を受け入れる用意がある程度あることが予想可能である。支援者の提案は、利用者側のこの受諾への傾きに沿う形でなされている。

この4つの特徴を持つ提案は、受諾へのプレッシャーが低められていても、受け入れられがちだという点は興味深い。受諾の可能性

を高めることに関しては、受諾へのプレッシャーを高めるよりも、受諾後の実行のプレッシャーを弱めるほうが有効かもしれない。

(2) 悩み・心配事の提示の開始

カウンセリングには、利用者の個人的課題の進捗状況の報告、就労状況の確認、今後の方針決定等、予め用意されたアジェンダがあり、多くの場合、利用者が「問題について語る」とは、主なアジェンダとして設定されていない。しかし、そのためのスロットは、利用者自ら、もしくは支援者の側から作り出され、利用されることで達成されている。ここでは、利用者の問題提示の開始におけるいくつかのパターンを検討する。

支援者の要請に対する問題提示

問題提示が支援者の要請に対する一つの行為（「報告」）を通して行なわれ、「問題について語ってもよい」スロットが用意されているケースである。

【事例 3】「問題の聞き取り」

- 1 支: んで:::- (0.2) >その 時に<
2 仰ってたのが:, 卒検:::が う
3 まくいかなく って:, >自信<が
4 なくて:, 就活:::は:: あ き
5 らめてるっていうふうに。
6 (0.2)
7 支: [仰ってるけど。
8 利: [あ:::そうですね。
9 支: そんなんであ[ってる?:
10 利: [()
11 (0.4)
12 利: °°##まあ:: あはい.##°°
13 (1.0)
14 利: ('と/その)::
15 (1.0)
16 支: 付け加えることある?
17 (2.0) ((支援者何か書き始める))
18 利: まあ,
19 (10.0)
20 利: °°ですね, °°
21 ((支援者ゆっくりを顔をあげる))
22 (7.6)
23 利: °°°ええ:つと(hh) °°°
24 (5.4)
25 利: んまあ就職:: 面談うけん#の:
26 -# h (0.2) 受けるのが:: #°え
27 っと:: °# [こわか- た(.) で-
28 支: [nhhhh hehhe
29 なるほど ね?

支援者の 16 行目は、「はい・いいえ」での返答を求めているが、実際には、「付け加えるべきことや情報があれば提示する」という要請である。この質問に対する適切な応答として求められているのは、限定された情報、つまり前回提示したような利用者自身の「問題」である。つまり、問題を利用者側が提示可能な状況を作り出している。

それに対して、利用者は「まあ」(18)で応答をいったん開始するが、長い沈黙、言い淀みによって「いいにくさ」を示す。さらに 23-27 行目の問題として理解可能なこと（「就職面談うけるのが怖かった」）の提示においても音の引き伸ばしや沈黙による発話の完了の遅延が見られ、この発話がデリケートな内容として組み立てられていることがわかる。一方で支援者は、十分に「待つ」ことをしており (19, 22, 24), 十分に答えるための時間を利用者にとらせている。つまり、利用者が示している言いくさに対する理解を示しているといえる。問題が 27 行目までで提示されると、支援者は、「なるほどね」(29)と、利用者の発話を「問題」が提示されたとして適切に受け止める。そして、この問題を特定するやりとりの後、支援者はこの問題に取り組んでいくことを再び提案する。

このような、問題提示が支援者の要請に対する一つの行為（「報告」）を通して行なわれており、「問題について語ってもよい」スロットが用意されているといえよう。

理由付けや説明に埋め込まれた問題提示
利用者の問題は、利用者が先に行った自分の発話に対して、何らかの理由や説明をする際に提示されることもある。

【事例 4】

- 1 支: まあそこはあきらめずにデスクワ
2 ークを探し:, 次に対処法を考え
3 るっていう :, 方法はあると思う
4 けど
5 利: °はあ::° ((俯いて鼻をかく))
6 (0.8)
7 支: 'か:もう'っかいから h:だ h 動か
8 す(ていうんじゃね hh)
9 利: もうそっちはやだ
10 支: で hh::: しよ hhh .HHH
11 [huhhuhhuhuh .hhh
12 利: [°ぜったいやだ°
13 利: もう なんかもう, 昔に働いた::,
14 (.)
15 支: う:::ん.
16 利: バイトのな:んか:< (.) に::,
17 でよく:-
(5 行省略)
23 利: バイトで::: .hh よく聞く::,
24 支: う:::ん.
25 利: ことばとか::,
26 支: う[::ん.
27 利: [キーワードとか聞くと<身体
28 がふく- (.) びくってするんです
29 よ::: [ふるえるんで' .=
30 支: [ふ:::ん, °へ:::°

【事例 4】の直前に、利用者は、デスクワークでのトラブルを語っている。それに対して支援者は、助言 (1~4) した後、デスクワークでなければ、「もう一回体を動かす(仕事)」に就くという別の対処法を笑いとともに冗

談として提示している。しかし、利用者は「もうそっちはやだ」(9, 12)と強くその助言を退ける。続く13行目の「もうなんかもう」という発話の開始のしかたを通して、利用者は、この話題に対して強い否定的な態度を持っていること、「昔に働いてた」で、過去の仕事に関することをこれから話そうとしていることを明示する。また、強い拒絶の直後の位置にあることで、支援者が7~8行目で言及した過去の職種に関することと聞くことができる。

ここで語られていくのは、未だに当時の嫌な記憶が甦るといって、現在、利用者が抱えている「問題」である。それは、直前の「ぜったいやだ」という強い拒否の理由説明として導入されている。つまり、「問題の提示」は、先の自分の応答の中で達成されており、話し手は、単なる「問題の提示」の達成だけではなく、それによって説明を足したり理由を述べたりしている。このように、「問題」がそれ自体「語ること」として扱われるのではなく、他の行為を達成するなかで提示されている例は、他にも観察された。

(3) 「自己卑下」発話の連鎖的特徴

ここでは、利用者が自分自身を表現するのに用いる否定的評価、いわゆる「自己卑下」的な発話に注目し、利用者の「自己卑下」発話を支援者が取り上げ、その根拠や理由の説明を求める連鎖的特徴を記述する。そして、支援者にとって、「自己卑下」発話を利用者の抱える問題を掘り起こし、検討するためのきっかけとして利用可能なものとなっていることを示す。

【事例5】(前半(5-1), 後半(5-2))の直前に、支援者は、利用者の就労状態が安定していることを評価し、利用者も、周囲から自分が「まったく使えない人間だとは思われていない」と自分を肯定的に評価している。しかし、それに続けて利用者は、体調が悪くなりがちなために、職場の人間関係に問題が生じていることに言及する。そのエピソードの後、1~2行目で、それでも「仕事は来るには来ている」という肯定的自己評価に戻った後、自己卑下をする(10~13)。

なお、事例中の印「→」は自己卑下発話、「」は自己卑下発話に対する反応と根拠の求めをしている発話を示す。

【事例5-1】「代用品」(前半)

- 1 利： までも↑何だかんだ↓で：(.)う：
 2 ン 仕事↑来るには来るんですよ：
 3 支： [[。¥そうだね¥。
 4 利： [[ちょっと 空いたりするけど：
 5 [に さん日あい：-(.)空くとか：
 6 支： [hh
 7 利： たまにあるけど：(.) う：：[ん
 8 支： [そう
 9 か .h hehe [hehehe
 10 利：→ [まあ取りあえず代

- 11 用品ぐらいには<な-(.)てるっば
 12 い>：：(.) ↓ん： 誰かの代用品ぐ
 13 らいには h [hh
 14 支： [え：： 誰かの代用品
 15 って ど-どの辺からそう思うの？

ここで注目すべき「代用品」という表現は、本来必要なものが手元にないときに代わりに使われる間に合わせのものを意味する。また、「誰かの代わり」のような「人」でなく、「代用品」という「もの」を示す表現を使っている。さらに、「代用品ぐらいにはなってる」と、「ぐらい」をつけることで、代用品としての自分は、一般に要求されるレベルの最低ラインを、かろうじてクリアしていることを示している。この表現は、利用者が自分自身を職場における存在を、組織の十全的な構成員ではなく、欠員を埋める程度のものと捉えていることを示しており、自己卑下をしていると聞くことができる。

支援者は、14~15行目で同意も非同意もせず、「どの辺からそう思うの」と、利用者が自分を誰かの代用品だと思ふ根拠の在処を尋ねる。【事例5-2】を見ると、質問に利用者は抵抗を示し、その後、質問とそれに対する抵抗というやり取りが繰り返される。

【事例5-2】「代用品」(後半)

- 14 支： え：： 誰かの代用品って ど-どの
 15 辺からそう思うの？
 16 利： ン：：？(0.8)どの辺からつか、
 17 とりあえず仕事があれば：：(.)
 18 ((ノック音)) ()しか
 19 いんだけど。HH ((鼻すする))
 20 支： ン：：なんで-なんで代用品なの？
 21 (.)
 22 利： ン？
 23 支： なんで代用品なの？
 24 (1.0)
 25 利： なんてと言われても な-なんか
 26 そんなイメージなんです(h)けど：
 27 (h).HHH
 28 (0.2)
 29 支： ど-ど-どこからそう思うの？
 30 ((腕を組む))
 31 (1.6)
 32 利： え：：？どっから？
 33 (2.0)
 34 支： え ゆってるだけ？
 35 (0.6)
 36 利： ああ 何かそういう節：：が強い：
 37 he [hehe かな？ .H HHH
 38 支： [hh え ¥自分でそう思ってる
 39 だけっていうこと？hh
 40 利： あんまり：：いい(職種名)では
 41 ↑な：↓いと思うので↓自分では：：
 42 わりと：：ミスるし(.)う：：ん

支援者の最初の「どの辺から」という根拠の在処を尋ねる質問は、自己卑下の根拠が利

用者の内部ではなく、利用者を取り巻く外部にあることを前提としているように見える。それは、このやりとりの前に利用者が職場の人間関係についての問題を語っていたことと無関係ではないだろう。それに対して、利用者は、答えることに抵抗を示し(16~19)。そ支援者から繰り返される質問(20, 23, 29)に対して、利用者は、答えることに抵抗し続ける(25~27, 32)。そして、自己卑下の根拠や理由について利用者の答えが得られないことが明らかになった段階で、支援者が「え ゆってるだけ?」(34)と、自分を「代用品」とみなす根拠が外部に具体的に存在するのではなく、この会話において利用者が単に自分をそう描写しているだけである可能性に言及する。ここで利用者は抵抗をやめ、肯定する(36~37)。さらに、39行目で「自分でそう思っているだけ?」と、「ゆってる」という、口頭で自分自身を表すその場限りの外的な表現レベルから、「思ってる」、つまり、継続的で内的な意識レベルの自己評価に言い替えて質問をすると、利用者は、「いい(職種名)」ではない」と、自分の仕事の能力について感じていることを述べる(40~42)。

この自己卑下をめぐる展開の特徴をまとめよう。まず、利用者の自己卑下は、自己肯定の後に位置しており、この配置は、私たちが自慢に聞こえる可能性のある内容で話を終わらせないようにするための合理的なやり方であると考えられる。しかし、支援者の14~15行目の質問は、その合理的に示された自己卑下に根拠を求めるものであった。自明のことに説明や根拠や理由を求めることは、時として挑戦的な意味合いを持つ(例えば相手のしていることをわかっているのに「何しているの」と尋ねる等)。肯定的自己評価で話を終わらせないために、適切に示したはずの自己卑下に根拠を求めることは、そうした自己卑下の働きを否定しかねない。利用者が「なんどと言われても」と、支援者の質問自体に対する不満を示しているのは、そのためであると考えられる。

その抵抗に対して支援者は、質問を繰り返し、腕を組んで利用者に向き合うといったことを通して、この発話を見逃すべきではない重要なものと捉えており、満足のいく回答を利用者が示すべきであると主張しているように見える。支援者は、この後のやり取りで質問と確認の要求を重ね、利用者から、自分が作業で犯すミスがすぐやり直せる軽度のものであること、自分がこなせる作業量は他の人よりもやや少ない程度であることを引き出す。それをふまえて、利用者が「もっとしっかりしなければ」という義務感に縛られずに、自分を開放し、仕事はできる範囲でよいと考えるように助言しており、利用者もその助言を受け入れている。

以上の分析から、利用者の自己卑下は、支援者の問いかけとそれに対する応答を通して、問題共有と支援のために有効な情報を獲

得する機会になることがわかった。

(4) まとめ

「引きこもり」の若者の自立支援活動における相互行為について、以上の特徴を記述できた。この成果がコミュニケーションを通じた支援現場の一助となることを期待したい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計3件)

西阪仰; 早野薫; 黒嶋智美 (2015). 就労支援カウンセリングの会話分析 『研究所年報』45, 21-41. (査読無)

Aug Nishizaka & Masafumi Sunaga (2015) Conversing while massaging: Multidimensional asymmetries of multiple activities in interaction, *Research on Language and Social Interaction*, 48(2), 200-229. (査読有)

Satomi Kuroshima & Natsuho Iwata (2016) On displaying empathy: Dilemma, category, and experiences, *Research on Language and Social Interaction*, 49(2), 92-110. (査読有)

[学会発表](計3件)

岩田夏穂 (2014) 「就労カウンセリグにおける「自己卑下」の展開」社会言語科学会第34回大会, 2014年9月14日, 立命館アジア太平洋大学(大分県・別府市)

Aug Nishizaka (2015) The structuring of the body in interaction, The International Institute for Ethnomethodology and Conversation Analysis (招待講演), 2015年4~7日, University of Southern Denmark, Kolding, Denmark.

Satomi Kuroshima & Lorenza Mondada (2015) Participating without speaking the language of the encounter: On multimodal of action formation for participation. *Language and Bodies in Interaction* (国際大会), 2015年6月24~27日, University of Basel, Basel, Switzerland.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 夏穂 (IWATA, Natsuho)

政策研究大学院大学政策研究科・准教授
研究者番号: 70536656

(2) 研究分担者

西阪 仰 (NISHIZAKA, Aug)

千葉大学文学部・教授

研究者番号: 80208173

早野 薫 (HAYANO, Kaoru)

日本女子大学文学部 英文学科・准教授

研究者番号: 20647143

(4) 研究協力者

黒嶋 智美 (KUROSHIMA, Satomi)

日本学術振興会特別研究員(PD)・千葉大学

須永 将史 (SUNAGA, Masafumi)

立教大学・助教